



☆ 例題21 次の文章を読んで、後の問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

「我を忘れる」という表現がある。自分のことを忘れる、というのだから変な感じがするが、考えてみるとなかなかうまい表現だなと思う。映画などを見ていると、知らぬ間に主人公に同一化してしまって、主人公が苦境に立つと、こちらも胸が苦しくなったり、知らぬ間に手を握りしめていて、汗ばんできたりする。①それは別に映画の話であって、自分はいすに座ってそれを見ているのだから、何のことはない、と言えはそれまでだが、そんな観客としての自分のことは忘れてしまっているのだ。

子どもの劇場の仕事をしている人たちと雑談していると、面白いことを聞かせていただいた。最近の子どもたちは、劇を見ている、それに入り込まずに、なんのかんのと行って、やじ^(注1)で劇の流れを止めようとする。ピストルを見ると、「あんなのおもちゃだ」と言う。人が死んでも「死ぬまねしているだけ」と叫ぶ。悲しい場面ときに、妙な冗談を言って笑わせる。要するに、「クライマックスに達してゆくのを、何とかして妨害しようとしている」としか思えない。こうなると劇をする人も非常に演じにくいのは当然である。

主催者の人たちがもっと驚き悲しくなるのは、そのような子どもたちがやじで騒いで喜んでいた後で、その子の親たちが、「今日は子どもたちがよくノッていましたね」と喜んでいてのを知ったときであった。この親は「②ノル」ということをどう考えているのだろうか。子どもたちは騒いで楽しんでいるかのように見える。しかし、実のところは劇の展開に「ノル」のに必死で抵抗しているのだ。「我を忘れる」のが怖いのだ。

(河合隼雄『しあわせ眼鏡』海鳴社)

(注1) やじ：話を聞いたり劇を見たりしながら、大きな声でからかったりして騒ぐこと

問1 ①それは何を指しているか。

- 1 主人公が苦境に立っている状況
- 2 映画を見ている状況
- 3 胸が苦しくなったり、汗ばんできたりすること
- 4 主人公に同一化すること

問2 子どもの親たちと筆者とでは、②ノルという言葉を使った意味で使っている。それぞれ、どういう意味だと思っているか。

- 1 子どもの親は「騒いで楽しむ」、筆者は「芝居や映画の世界に入り込んで、我を忘れる」という意味だと思っている。
- 2 子どもの親は「芝居や映画の世界に入り込んで、我を忘れる」、筆者は「騒いで楽しむ」という意味だと思っている。
- 3 子どもの親は「我を忘れる」、筆者は「クライマックスに達するのを妨害する」という意味だと思っている。
- 4 子どもの親は「クライマックスに達するのを妨害する」、筆者は「我を忘れる」という意味だと思っている。

問3 この文章の内容として最も適切なものはどれか。

- 1 最近の子どもたちはすぐ「ノル」ので、劇をする人は演じやすい。親もそのことを喜んでいる。
- 2 最近の子どもたちはやじで騒ぐので、劇をする人は演じにくくて困る。しかし、子どもが楽しんでいるのだから、親と同様に演じる側も喜ぶべきである。
- 3 最近の子どもたちは、映画や芝居の世界に入り込んで「我を忘れる」、ということが少ない。親もそのことに気づいている。
- 4 最近の子どもたちは、映画や芝居の世界に入り込んで「我を忘れる」、ということが少ない。しかし、親はそのことに気づいていない。



キーワード：「我を忘れる」、子ども、劇場、やじ、劇、ノル
 → 「我を忘れる」という表現と、子どもが劇を見ることについて書かれた文章？

問1に答える

「指示語」を含む文を見る。

①「それは…映画の話であって、自分はいすに座ってそれを見ている…」

つまり、「それ」＝「映画の(中の)話」＝映画の主人公が苦境に立っている状況

自分は「それ(＝映画の主人公の状況)」を見ている。

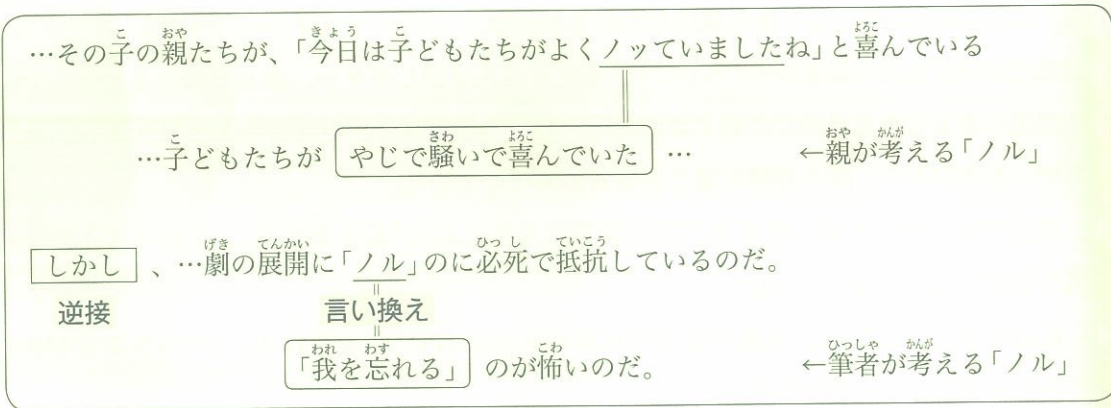
- 1: 正解
- 2: 映画を見ている状況とは、自分が「それ」を見ているという状況である。
- 3: 胸が苦しくなったのは自分の状態で、映画の中の話ではない。
- 4: 主人公に同一化する、というのは自分の状態で、映画の中の話ではない。

問2に答える

「下線部」を含む文を見る。

「この親は「ノル」ということをどう考えているのだろう。」

「この親」の考える「ノル」とはどういうことか、さかのぼって探す。



- 1: 正解
- 2: 筆者の考えと、子どもの親の考えが、反対になっている。
- 3: 我を忘れる意味だと考えるのは筆者であり、子どもの親ではない。
- 4: 親は子どもの行動を「妨害」だとは考えていない。ただ「騒いで楽しんでいる」と捉えているだけである。

問3に答える

段落ごとの内容をまとめる。

第1段落：「我を忘れる」という言葉の紹介

第2段落：最近の子どもがやじで劇を止めようとするという話

第3段落：やじを飛ばす子どもは、「我を忘れる」ことができないのだという筆者の考え

- 1: 劇をする人は「非常に演じにくい」と書かれている。
- 2: 筆者は親が喜ぶことを問題だと考えており、演じる側も喜ぶべきだとは言っていない。
- 3: 親は気づいていない。
- 4: 正解

練習51 次の文章を読んで、後の問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

①友人とはなんぞや、の答えは色々だろうが、臨床心理学者の故・河合隼雄^{かわいほやお}さんの著作中にこんなものがある。「夜中の十二時に、自動車のトランクに死体をいれて持ってきて、どうしようかと言ったとき、黙って話に乗ってくれる人」(『大人の友情』)。なかなか刺激的だ。

ある大学で、入学後1週間もしないうちに「友達ができない」と学生が相談にきたそうだ。「努力したがうまくいかない」と言う。その話に河合さんは驚いた。1週間努力すれば友達ができる、と思っていることにである。

河合さんが健在なら何を思うだろう。せっかく入った大学を、友達ができないからと中退する学生が増えているという。このため、いくつかの大学が「友達づくり」の手助けを始めたそうだ。

学生たちは、友達がいない寂しさより、いない恥ずかしさに耐えられないのだという。「暗いやつ」と見られたくない。周囲の目が気になって、学食^(注1)で一人で食べられない。あげくに②トイレで食べる者もいるというから驚かされる。

昨今、「友達がいなさそう」というのが、人への最も手厳しい罵倒^(注2)ではないかと、作家の津村記久子^{むらきくこ}さんが日本経済新聞に書いていた。人格の根本部分を、あらゆる否定をほのめかして^(注3)突くからだという。やさしげでいて残酷なご時世、学生ならずとも孤高には耐えにくいようだ。

携帯電話に何百人も「友達」を登録して、精神安定剤にする学生もいると聞く。だが、友情とは成長の遅い植物のようなもの。③造花を飾って安らぐ心の内が、老婆心^(注4)ながら気にかかる。

(朝日新聞 2010年9月17日)

(注1)学食：学生食堂

(注2)罵倒：ののしる言葉

(注3)ほのめかす：遠回しにしぐさや言葉に表して示す

(注4)老婆心：必要以上に気をつかい、世話を焼こうとする気持ち

問1 ①友人とはなんぞやとあるが、河合隼雄^{かわいほやお}さんによると、どんな人が友人なのか。

- 1 いつでも遊びにきてくれて、私と話してくれる人
- 2 どんな状況にあっても、私に協力してくれる人
- 3 私に新しい刺激を与え、私を楽しませてくれる人
- 4 私のためなら死体も怖がらず、勇気を出してくれる人

問2 ②トイレで食べるのはなぜか。

- 1 一人だけの空間にいれば、一緒に食べる友達がいないことを見られずに済むから。
- 2 自分に自信がないので、自分が食べている物や姿を見られるのが恥ずかしいから。
- 3 友達のいない寂しさを忘れるには、楽しそうに食べる人のいない場所がいいから。
- 4 「暗いやつ」だと思われると、周りの友達に嫌われてしまうかもしれないから。

問3 ③造花とは何を指すか。

- 1 本当の友人のようだが、実は本物とはいえない「友達」
- 2 本当の友人よりも長く美しい関係が続けられる「友達」
- 3 生きた植物とは違って、いつまでも枯れない美しい植物
- 4 本物の植物とは違って、安くて世話をする必要もない植物

練習52 次の文章を読んで、後の問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

日本で本格的に時計が作られた記録は、西暦671年(天智天皇10年)まで遡ります。天智天皇が飛鳥(注1)において水時計を作らせたのが最初とされています。この天智天皇の水時計は「漏刻」と呼ばれ、四角い箱を階段状に重ねたような構造をしていたものと考えられています。時刻は鐘や太鼓によって民衆に告げられたと記録されています。日本書紀によると、この漏刻が設置されたのが太陰暦(注2)の4月25日のことでした。これを太陽暦(注3)に直すと6月10日になります。現在、この日は「時の記念日」とされています。

それ以来、さまざまなタイプの時計によって時間が計測されてきました。ただし、それぞれの時代に用いられた時間の制度は異なっていました。今では1時間は1日の24分の1であり、昼と夜とでは時間の単位が変わることはありません。このように、時間の単位が一定であるような時間の制度を「定時法」と呼びます。しかしながら、江戸時代から明治の初期のころまでは、昼と夜とでは時間の単位が異なる「不定時法」を用いていました。つまり、日の出を「明け六つ」、日の入りを「暮れ六つ」とし、昼も夜もその間を均等な六つの時間帯に分けていました。(中略)

つまり、③いつとぎの長さは、春分の日(注4)と秋分の日(注5)は、現代の時間の単位でいう2時間にあたりませんが、夏至(注6)に近ければ昼のいつとぎは2時間より長く、夜のいつとぎは2時間より短くなります。冬至(注7)に近ければ、その逆になります。

(一川誠『時計の時間、心の時間—退屈な時間はなぜ長くなるのか?』教育評論社)

(注1) 飛鳥: 奈良時代の都があった場所。現在の奈良県にある。

(注2) 太陰暦: 月の満ち欠け(月が丸いか細いか)を基準にして決めた暦(カレンダー)

(注3) 太陽暦: 太陽の運動を基準にして決めた暦。現在、多くの国で使われている。

(注4) 春分の日: 昼の長さや夜の長さが同じになる日。3月21日頃

(注5) 秋分の日: 昼の長さや夜の長さが同じになる日。9月23日頃

(注6) 夏至: 昼間(夜明けから日が暮れるまで)の長さが1年でいちばん長い日

(注7) 冬至: 昼間(夜明けから日が暮れるまで)の長さが1年でいちばん短い日

問1 ①漏刻とは、どのような時計か。

- 1 日本で初めて本格的に作られた時計
- 2 民衆に時刻を伝えるための鐘や太鼓が付いた時計
- 3 天智天皇が四角い箱を階段の上に並べて作った時計
- 4 西暦671年、飛鳥において世界で初めて作られた時計

問2 ②時の記念日とは、どのような日か。

- 1 日本で最初の時計に関する記録が発見された日
- 2 天智天皇が作らせた漏刻が設置された日
- 3 天智天皇が漏刻を作らせたということが民衆に告げられた日
- 4 太陰暦から太陽暦に直された日

問3 ③いつとぎの長さについて最も適切な説明はどれか。

- 1 冬は、夏より昼のいつとぎが長くなり、夜のいつとぎが短くなる。
- 2 冬は、夏より昼のいつとぎが短くなり、夜のいつとぎが長くなる。
- 3 いつとぎの長さは、季節によって変化するが、昼と夜では常に同じである。
- 4 いつとぎの長さは、昼と夜とで変化するが、季節によっては変化しない。

練習53 次の文章を読んで、後の問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

いたるところで子どもの虐待^(注1)が起きている。近所の人が通報しても親が虐待を認めなかったり、児童相談所で預かっても親が取り返しにきたり。なすすべ^(注2)はあるはずなのに、①機能していない。

「②社会が子どもを守る」などというが、それは美しい話で、子どもの生殺与奪^(注3)の権は最終的には親が握っている、と私は考える。

子どもを虐待する親というのは、「大人」になれていない。大人というのは、自分がエリートの立場になっているかどうかということである。エリートというと、いい大学を出て、高給取りの仕事についている人を想像しがちだが、それは違う。エリートとは、突き詰めれば、人の命を預かることなのである。

子どもがいくら言うことを聞かなかろうと、無条件で子どもを受け入れ、育てるのが、親である。子どもにとって、親は立派なエリートである。虐待をする親というのは、自分がエリートであるとは気づいていない。親というのはそれほど重い立場にあるのだが、それを知らず、周囲も教えずに子どもをうっかり持ち、挙げ句の果てに虐待する。そして、子どもの生きる権利を奪う。

人の命を預かったからには、他人に言えないことを黙って背負う忍耐が求められる。ときに汚れ役を買って出る覚悟も必要だろう。そういう意味で、③親になるエリート教育が求められるのである。

(養老孟司「親はみな「エリート」である」『AERA』2010.10.04号 朝日新聞出版)

(注1)虐待：ひどい扱いをすること

(注2)すべ：方法

(注3)生殺与奪：人をどのようにも思いのままにすること

問1 ①機能していないとはどういう意味か。

- 1 親が虐待を認めない。
- 2 子どもを親の虐待から守れない。
- 3 近所の人通報している。
- 4 児童相談所が子どもを預かっている。

問2 ②社会が子どもを守るという言葉について、筆者はどう考えているか。

- 1 美しい心を育てるために良いことである。
- 2 人を感動させる素晴らしい話である。
- 3 実現することの難しい理想論である。
- 4 社会が子どもを守るのは当然の話である。

問3 筆者の言う③親になるエリート教育とはどのような教育か。

- 1 子どもを社会の成功者にするために、どのように教育すべきかを教える教育
- 2 言うことを聞かない子どもをどのように育てればいいかを教える教育
- 3 豊かで愛情あふれる生活が子どもにとって不可欠であることを教える教育
- 4 親は子どもの命を預かる責任ある立場であるということを教える教育

練習54 次の文章を読んで、後の問いに対する答えとして最もよいものを一つ選びなさい。

下の文章は、高次脳機能障害(事故などで脳の組織が壊れ、物事をうまく認識できないために起こる障害)を持つ人が書いたものである。

「なんのために勉強するの」

もし子どもにそう聞かれたら、私はこう答えたい。

「脳が壊れてもちゃんと生きていくためよ」

高次脳機能障害では、その人のそれまでの人生が如実に(注1)出ると言われている。脳の一部が壊れたとき、脳は残された正常な機能を総動員して壊れた部分を補い、危機を乗り越えようとするものらしい。そのため、昔とった杵柄(注2)にしろ、叩けば出るほこり(注3)にしろ、①その人の歴史が浮かび上がってくるというのである。

その人の歴史とは、言い換えるなら、その人の積んできた経験だ。そして脳には、経験が記憶として保存されている。たとえふだんは思い出すことがなくても、幸せな経験も苦い経験もみんなしまいこまれていて、案外しっかりと長期にわたってストックしている。それをのちの人生で、必要に応じてうまく引き出しながら②使ってくれているのである。

脳が壊れて貧弱な思考しかできなくなっても、わずかに働く脳細胞をフル稼働して重要な人生の選択や決断をしなければならぬときがある。そのときの判断材料となるのも、やはり経験だ。経験のないことは、脳にも記憶されていない。ないものはどうやったら、引き出しようがない。

(山田規敏子『壊れた脳 生存する知』角川学芸出版)

(注1) 如実に：事実のとおり、はっきりと

(注2) 昔とった杵柄：過去に身につけた技能

(注3) 叩けばほこりが出る：過去を細かく調べれば、欠点や弱点が見つかる

問1 ①その人の歴史とは何を指すか。

- 1 高次脳機能障害を持つ人が重ねてきた経験
- 2 高次脳機能障害を持つ人が障害に至った経緯
- 3 危機を乗り越えようとしている人が書き続けてきた記録
- 4 危機を乗り越えようとしている人が危機に至るまでの過程

問2 ②使ってくれているとは、何(だれ)が何を、使っていることを指すか。

- 1 脳が、その中にしまいこまれた幸せな思い出を使っていること
- 2 脳が、その中には保存されているさまざまな記憶を使っていること
- 3 高次脳機能障害を持つ人の周囲の人々が、その人についての記憶を使っていること
- 4 高次脳機能障害を持つ人の周囲の人々が、その人の積んできた経験を使っていること

問3 この文章の内容として最も適切なものはどれか。

- 1 万一のために、どんな人でもできるだけ多くの経験をしておいたほうがいい。
- 2 将来何があっても困らないように、子どもはしっかりと勉強しておいてほしい。
- 3 高次脳機能障害にならないように、脳をよく使って生活することが大切である。
- 4 人生の選択や決断をする際には、自分の経験を振り返ってよく考えるべきだ。